

# 苦難の意味

写真・文：編集部 島田 浩

## 苦難に意味などあるのか？

誰もがぶつかる人生の壁。けがや病気、仕事や人間関係の悩み、就職や結婚、恋愛の失敗…。口には出せないことも多い。

そのストレスが体をむしばみ、大病に発展することさえある。年間3万人以上も自ら命を絶つわが国。なんともこの世は生きにくい事か。

「起こることすべてに意味がある」と言われるが、はたして苦難に意味などあるのだろうか？もしあるとすれば、それはどんな意味なのか？

## 聞きなれない中間世とは

以前読んで感銘を受けた本があり、折に触れて何度か読み返した。マイケル・ニュートン著『人生は何のためにあるのか』（VOICE刊）だ。著者は米カウンセリング界の大御所で、それまでの研究をまとめた本の中から2冊が日本でも翻訳され

ている。

サブタイトルをみて驚く人もいだろう。「死後の世界が教える―」とある。そう、博士は退行催眠によるカウンセリングで、被験者の過去の記憶だけではなく、生まれる前、



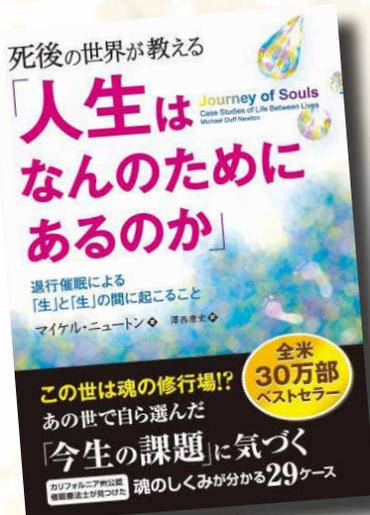
すなわち前世で死んだ瞬間からの出来事を、丁寧に聞き取り調査したのだ。この本では「中間世」と呼んでいるが、いわゆる「あの世」のことだ。

その中間世にスポットを当てているのが本書の面白いところである。そこに、苦難の人生が何のためにあるのか、そのヒントとなる情報がちりばめられているのだ。

## 人類にとって重要なテーマ

前世や中間世などといえば、ちょっと眉に唾をつけたくなる方も多い事と思う。本稿も、まほろばとして記事にすることに関し、疑問を感じる方もいらっしゃるかもしれない。オカルトまがいの内容としてお客様に誤解を与える可能性や、前世という事の真偽がはっきりしていない内容を、会社の広報として記事にすることは問題があるかもしれない。

確かに、前世や死後生、魂の存在については、医学界、科学界において否定的風潮であり、決定的に証明されたわけではない。しかしまた、同時



に完全に否定されたわけでもないのが現状だ。未だ解明されていない人類の重要なテーマの一つともいえる。真剣にこの問題に取り組んでいる医師や医療関係者、心理学者や哲学者をはじめとする研究者等によって、近年多くの論文や書籍が発表され、話題となっているのも事実だ。

## 世界的に研究されている臨死体験

臨死体験研究の第一人者である医師のレイモンド・ムーディーや、前世療法のブライアン・L・ワイス博士、名門ハーバード・メディカル・スクールで長らく脳神経外科医として治療と研究にあたってきたエベン・アレグザンダー医師の『プルーフ・オブ・ヘヴン—脳神経外科医が見た死後の世界』など、海外の研究者により、多くの文献が発表されている。日本でも1994年に出版されたジャーナリストの立花隆氏による『臨死体験』上下刊や、当時福島大学教授であった飯田史彦氏による『生きがいの創造』シリーズ、最近では東大医学部教授の矢作直樹氏による『人は死なない—ある臨床医による摂理と霊性をめぐる思索』など一連の著作がヒットしている。また、横浜でイーハトーヴ・クリニックを開院されている萩原優医学博士は、がん治療の一環として催眠療法（ヒプノセラピー）を導入し、成果を上げている。同じ

く横浜にある池川クリニック院長で医学博士の池川明氏は、生まれてきた子供の胎内記憶から同じテーマを追った。いずれも科学的に解明された現象ではないが、そこには何らかの真実が隠されている可能性があるのではなかろうか。

## 人間はホリスティックな存在

近年、自然食を含むホリスティック（全体的・包括的）な世界観の中には、人間を肉体面だけではなく、心や精神などスピリチュアルな存在として捉え、全人的に扱う時流もある。

また、人生とは何かという哲学的見解を含む本件からは、マイナス面だけではなく何か有意義な事案も生じうると思われる。そのような経緯を踏まえ、今回は情報の真偽には触れず、本書を読むことで感じた個人的な見解のみ提示させていただきたいと思う。どうか、そののところをご理解頂き、否定的見解をお持ちの方には何卒ご容赦頂き、読み飛ばして頂ければ幸いである。

## あの世への旅立ち

前置きが長くなったが、本書には何年にも及ぶ数多くの被験者に対する臨床から、死後の世界がありありと描き出されている。多くの被験者に共通する体験をまとめると、おおそ次のようになる。

物語は、前回亡くなる瞬間から始まる。マイケル博士に誘導され、被験者はその記憶を語り始める。対話をそのまま記録しているのでとても分かりやすく臨場感が伝わってくる。

まず、退行催眠により被験者は、今の悩みの原因になっている過去に生きた時代まで前世を遡ることになる。



さらに博士に誘導されながらその人生の幕を閉じ、体を離れて魂（あるいは意識体）となって、いまや肉のむくろと化した自分自身を見下ろす場面へと移動する。やがて光に導かれトンネルのような所を通して、その場所、「中間生」へと到るといふ。

## 人生を再点検させられる

人によって様々ではあるが、ガイドスピリット（指導霊：以下ガイド）や過去に亡くなった親しい人々に出会い、まもなくそれまでの人生を走馬灯の様に回想するそうだ。よい行いも、そうでないことも、自分だけでなく関わった人の感情も同時に感じ、深く反省することになるらしい。（ちょっと、怖いですね…）

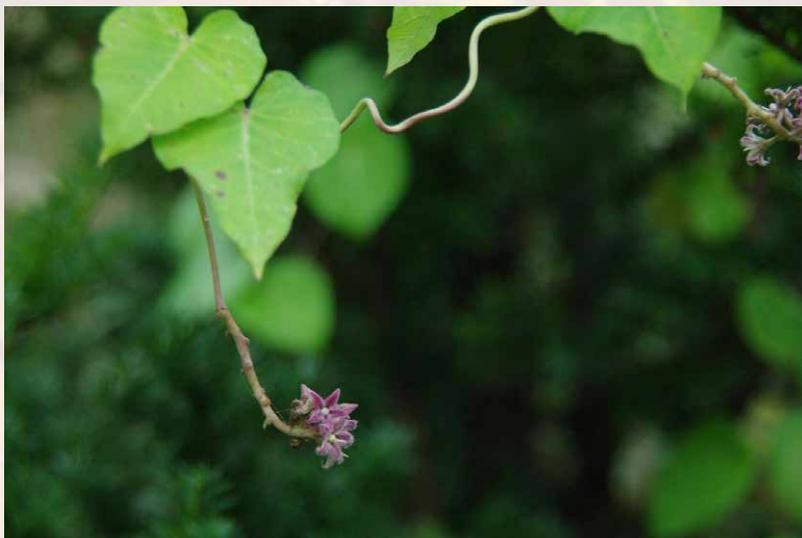
その後、それぞれにとってふさわしい階層へと導かれ、ガイドのもと仲間の魂たちとともに、前回の人生で負った魂の傷を癒したり、または更なる学びの時を経て、いよいよ次に生れる時期が訪れるようだ。（本質的には時間が無い世界の世界だ……）

## 次の人生を計画するシアタールーム

ここまでは類書で読んだことがあったが、実は、ここからが、この本の面白いところだ。

時が至った魂は、ガイドにあたかもシアタールームのような部屋に通されるらしい。そこで見せられるのが、次の人生の大まかなシナリオなのだ。

まるでリアルな3D映画でもみるように、自分が生まれる時代や地域、両親、出会う人々、突然の怪我や病気、恋愛と結婚、人に騙されたり、傷ついたりしながらも、果敢に人生に挑戦してゆく



その一部始終を見せられるという。しかもそれらは、基本的にはガイドの意見も聞きながら、自ら選んだシナリオだといふのだ。（ただし、あくまでもシナリオなので、私たちはその通りに実行する自由も、また道を外れる自由も持ち合わせているようだ）

## 助け合う魂のグループ

それは、その人生を通してしか得られない、前回から持ち越した課題をクリアするための、貴重なレッスンの機会だといふ。私たち魂は、尻込みしながらもそうすることで自分自身が一番成長できることを知っているのだ。

そして、ガイドに促され、いよいよ決意し、この人生へとやってくる。しかし、その時、近くにいた、とても仲の良い魂の一人が、こう言うのだ。

「今回は私があなただを傷つけるその役をやらせてもらう。それであなたが成長できるなら…」と。



そうして、互いに助け合いサポートしあう魂の仲間とともに、意を決して一緒に（時を見計らい）この世へと降りてくるそうだ。まさに人生は舞台上、主人公は私たちなのだ。そして、私たちの身近にいる人々は、とても深い縁えにしにある魂のグループに属しているという。

## 人生の仕組み

う～ん…。なんともわかには信じがたい話である。博士によるとほとんどの被験者が同じような回答をするようだ。もし、これが本当だとしたら、人間存在に関する様々な事実が垣間見えてくるのではないか。

● 私たちの本質は魂（あるいは意識を持つエネルギー体）であり、肉体が滅んでも生き続けるということ。

● 私たちは自らを成長させるためのシナリオをあらかじめ選び、いったんすべての記憶をリセットしたのち、

望んでこの親、この時代、この状況に生まれてくるということ。

● 一見悪いと思われる出来事や、困難さえも、あらかじめ織り込み済み…。それらはすべて意味があって起こっているということ。

● その意味では良い悪い、善も悪もない。すべて人生という体験を通じた、私たち魂の学びがあるだけ。

（実はここに書いた以外にも、様々な示唆に富んだ本であるが、とても書ききれないので、ご容赦いただきたい。）



## たましいの目的とは？

本当に人は、魂として生き続けるのだろうか。本当に私たちは、この人生をあらかじめ計画して、この世に来ているというのだろうか。

私たちは誰で、何のためにここに存在しているのか。

誰もが豊かになりたいと思っている。しかし、物質的充足だけでは、私たちは真に満足する事はできないようだ。前世で私たちはあらゆる生を重ね、様々な人種や立場を経験してきたという。支配者にも奴隷にも、殺す者にも、殺される者にも…。

もし、前世があるとすれば、魂はなぜ、そのような体験を繰り返してまで、人生を再び生きようとするのだろうか。

## 成長する事が魂の目的

この本によると、あちらの世界にいるとき、魂が望むのは、自らの成長だそう。前回の人生で

成しえなかったこと、失敗をしでかしてしまったことなど、なんとか今回の人生で補おうとしているのだそう。

成長する事。生命は成長するという本質を備えている。

万物は、成長する。草木も、人も、星も。

魂もまた、成長しようとしているのだろうか。

肉体を持たない魂が成長するにはどうすればいいのか。それが、人間に宿り、苦勞をして心を成長させるこのシステムを生み出したというのだろうか。

## 問題を味わう

この地球という苛酷な環境で様々な経験をすることや、肉体を持ち、深く感情を味わうことで、はじめて理解できることがある。怒りや苦しみ、涙と震えるような歓び…。人間としてこれらの様々な感情を味わうこと自体に意味があるという。

ということは、目の前の問題を経験することこそが、人生の重要な目的であるということだ。それは逃げたり、避けたりするばかりでなく、むしろ喜んで取り組むべきものかもしれない。

## しっかり自分に向き合ってみる

人生に巻き起こる苦難や問題は、自分に向き合うことを余儀なくさせる。忙しきでこれまで見ないようしてきた事、自分をないがしろにしてきた事に、向き合わざるを得なくなる。心の底から低くささやく魂の声に、耳を傾けるようにさせられる。それは、一度見失ってしまった本当の自分を取り戻すための、最大の恩恵なのだ。

実は、私も過去にそのような状況に陥った事が何度かある。いつもはつい目を背けてしまうところだが、この時ばかりは、今逃げたらこの人生きっと後悔すると、強く思った。勇気を奮い起こし、自分の弱さに立ち向かわなければならぬ、そう心から感じたのだ。今はその感覚に従ってよかったと心から思っている。

もし逃げたら、また最初からやり直しのだろう。そして、あの世に戻ったときに、深い後悔の念に包まれるに違いない。

## 良い悪いは心ひとつ

ある意味、前世や中間世があるかどうかに関わらず、良い事も悪い事も、すべては心の捉え方もいえる。同じ出来事なのに、最悪と思う人もいれば、それを楽しむ人もいないではないか。障がいを持って生れてきたのに、底抜けに明るい人もい



れば、五体満足でも現状に不満ばかりの場合もある。実は、心の持ち方一つで、人生の意味は良くもなったり、悪くもなったりするのだ。

## ピンチはチャンス以上のもの

ピンチはチャンスと言われるが、それ以上の恩恵を与えてくれることもある。

例えば、まほろばの2004年の移転劇がそうだった。古くからのお客様はご存じだろうが、あのとき、前の店舗を追い出されたからこそ、そして、すぐに土地が見つからなかったおかげで、今の土地が見つかった。あれがなければ、今どうあるかさえわからない。当時の大家さんには、今は感謝の気持ちしかない。

## 出来事に隠されたプラスの意味

「どんな出来事にも必ずプラスの意味がある」と言われている。一見悪い事と思われる状況の中にある、プラスの側面に光を当ててみるのだ。い

ったい自分はその出来事から何を学べるのだろうか。その出来事の中にある、プラスの意味は何だろうか？ そう考えてみるといい。

悪いことがあると、暗いことばかり考えがちだが、明るい面に目を向けてみると、意外なことが見えてくるものだ。影があるのは、陽が当たっているから。それが自然界の法則。陰が強く大きいほど、陽もまた大きいといえる。

それは、健康的な食事に変えたことだったり、心のあり方やライフスタイルの変化かもしれない。すぐに答えは出ないかもしれない。場合によっては10年、20年かかるかもしれない。

しかし、何年か経ち、落ち着いたところになってはじめて、「ああ、今の自分があるのは、あのときの、あの経験が、あの苦労があったおかげだ」と素直に思え、そのことがあって本当に良かったと、心から感謝できるようになるものだ。だからこそ、前向きに、苦難や自分の苦手な部分に向き合う事が大切なのだろう。その先には、人間として一回り成長した、未来の自分があるのだ。

## すべてを受け入れる

それでもやはり、人生には辛くて、やりきれない事もあるだろう。人に裏切られたり、侮辱されたり、どうしても許せないことや思い出したくないことさえあるかもしれない。

そんな時は思い出してほしい。その出来事は、私たちの成長のため、とても仲の良い魂が演じてくれたのかもしれないと。すべてを受け容れ許す事は難しいかもしれないが、あと一歩そこを越え

ることで、私たちもまた癒されるのだと思う。

そして、困ったときには、必ず助けの手を差し伸べてくれる人がいるものだ。その人もまた大切な魂の仲間ではないだろうか。

## 今がベストと考える

もし、人生に最初からシナリオがあるのならば、この現状こそが私たちが望んだベストの状況に違いない。思い通りにいかないことや、苦しくつらい事もすべて、私たちがあちらの世界で思い描いたことかもしれないのだ。

もちろん、この話を頭から信じる必要はない。とりあえず、「もしそうだったら…」と考えるのも一つではないだろうか。私自身、そう考える事で随分心が楽になった。

## 人生の秘薬

人生には特効薬などない。しかし、愛するという秘薬があるようだ。人を愛するだけでない。この世で一番愛されたいと願っているのは、他でもない自分自身だ。

親や先生など大人からダメ出しを食らいながら生きてきた私たちは、なかなかダメな自分を受け入れられず、がんばって、自分を押し殺して、耐えて、耐えて、そうやって目の前の試練を乗り越えようとする人が多い。でも、そうやって、いくら目をつぶっても、心の中にはありのままの自分を受け入れてほしい子供の自分の存在が、いつまでも、いつまでも居続けるのだ。



## 自分を認め愛する

試練には、がむしゃらに頑張っただけで打ち勝つことばかりではなく、打ちひしがれ、ペしゃんこになったダメな自分をも受け入れて、しっかりと胸の中で抱きしめることで乗り越えられることもある。ダメでもいい。ありのままの自分でいいんだと、自身を認めてあげる事。むしろその方が近道かもしれない。

自分がしっかりと自分自身から愛された時、はじめて周りの人をも本当に愛することができるようになるのかもしれない。逆も言える。周りの人を愛することは、自分を愛することでもあるのだろう。私たちの学びは、人の痛みや苦しみがわかるようになるため、やさしさを知るためにあるのかもしれない。悲しみを知るほどに、人は優しくなれるのだから。



## 心の思いに従ってみる

ふとした時に、心に浮かぶその思いは、もしかしたら人生のシナリオを魂が思い出しているということも考えられる。たとえ常識的に見ておかしいとか、頭で考えると「そんなはずはない」とか思うようなことであつたとしても、心の思いに正直に行動してみることも必要だ。やってみて、はじめてわかることも多いものだ。

## 夢や希望という魂の栄養

そして、誰もが心に抱く夢や希望。実はそれが魂の栄養でもある。自分の欠点を克服しながらも、

歌ったり、描いたり、庭をいじったり、自分の得意なことやその能力を活かし、他者に奉仕する事。それが互いの魂の喜びを生み、自分らしい人生を生きることにつながる。

## もう一つ大切な目的

互いの魂が喜びに震えたそのとき、分離の壁が消え、自他の一体感という感覚を味わうことだろう。それが生まれてきたもう一つ大切な目的ではないだろうか。

誰かが喜んでくれると自分もうれしい。なぜか？

それは、目の前の誰かとは、ほんとうは自分自身でもあるからなのだ。

魂の成長とは何か？

それは大げさに言えば愛に気づく事。自他の融合であるともいえる。

それをバラバラに分離したこの世界で成し遂げると言う難事

業。それが魂の真の目的かもしれない。

そして、それこそが、私たちがこの地上で苦難の道を選ぶ理由でもあるのだろう。

## 死はけっして悪いものではない

ニュートン博士の報告は、苦しみの意味だけではない。必ず死にゆく私たち人間の生きる意味をも考えさせてくれる。

もしかしたら、人は死んでからも魂として生き続けることができるのかもしれない…。博士によるカウンセリングの記録は、残された家族にも希望を与えてくれるものだ。

死は失敗じゃない。けっして悪いことじゃない。むしろ新しい宇宙への旅立ちであり、苦難を乗り越え生き抜いたこの世という人生学校の、めで

たい卒業式でもある。とてもさみしいし、悲しいけれど…。そう思えるようになった。

だからと言って、この人生を否定することもない。むしろ、与えられたこの人生がより愛おしく思えるようにさえなった。

## 人生の宝物

苦難のおかげで、人生で一番大切なものが見つかることだってある。

今まで、忙しくて、忙しくて、目も向けなかったこと。

身近な人との他愛もない会話の愛おしさ。

野辺に咲く花の可憐な命。

いずれ誰もが死を迎えるというこの人生。その不条理の中にある、はかなさ、美しさ、愛しさに心が向くようになるかもしれない。



## 人生に悪いことなんてない

人や相手がどう思うかではない。

自分がどう思うかが大切。

人生は自分のものだから。

ほんとうは人生に悪いことなんてないのかもしれない。

良いも悪いも、人生の意味は、自分が決めているのだ。

人から見て悪いことが、必ずしも本人にとって悪いこととは限らない。

人は苦難に逢うことで、より謙虚に、心が強くなったり弱くなったりするのだから。

たとえば、人から笑われるような人生だったとしても、自分を大切に、生き切れればいい。

そうして生きることそのものが、この世にやってきた理由なのだから。

私たちは、愛するためにここに来たのだから。

その中に必ず、美しく光り輝く宝物があるのだ。

そして、世界に起こっている様々な事ですら、そこに何か良い意味が隠されているに違いないと思うのだ。

## (最後に)

ずいぶん簡単そうに書いてしまったが、どっこい、人生こんなもんじゃない。実際、事が起これば、オロオロするばかりだろう。

いろいろ書いてみたが、何か一つでもヒントになれば幸いこの上ありません。

どうか皆様の人生が、心穏やかで、輝く喜びに包まれます様に！

